

〔研究ノート〕

モンゴル帝国期東トルキスタンの宗教
—新疆イスラム教小史 ②—

〔Research Notes〕

丸山 鋼二

The Religion of Eastern Turkistan in the Mongol Empire Period
: A Short History of Islam in *Xinjiang* ②

Koji MARUYAMA

【目次】

- | | |
|---|--|
| <p>1 モンゴル帝国の宗教寛容政策
 (1) テュルクの宗教観
 (2) カラキタイの宗教寛容政策
 (3) チンギスによる宗教寛容政策の復活</p> <p>2 新疆東部の宗教状況：西ウイグル仏教王国
 (1) 西ウイグル王国におけるマニ教と仏教
 (2) ウイグル語仏典の翻訳
 (3) モンゴル帝国とウイグル文化
 (4) ウイグル王国の消滅</p> <p>3 新疆西部・南部の宗教状況：イスラム世界</p> | <p>4 新疆北部の宗教状況：ネストリウス派キリスト教の流行
 (1) 新疆北部の宗教概況
 (2) ネストリウス派の流行
 (3) 新疆におけるネストリウス派の布教
 (4) テュルク人キリスト教徒</p> <p>5 チャガタイ・ウルスの成立
 (1) チャガタイの所領（ウルス）
 (2) モンゴル帝国とムスリム</p> <p>おわりに</p> |
|---|--|

Abstract

After Islam was brought into the west area of the Eastern Turkistan (*Xinjiang*) by the Qara-Khan Dynasty in the 10th century, it took 500 years until the establishment of Islamization in the Eastern Turkistan when the Buddhism power was expelled from *Hami* (the east of *Xinjiang*) in 1513. At the beginning of the 12th century, the Qara-Khan Dynasty was driven away from the eastern Central Asia by non-Islam Qara Khitay. From the beginning of the 13th century the eastern Central Asia was also under the rule of non-Islam power, the Mongol Empire. During the two hundred years, Islam lost its

superior position in the central part of the Silk-Road. Islam confronted with the biggest crisis due to the prosperity of Buddhism and Nestorianism.

The reason is that both Qara Khitay and the Mongol Empire executed a generous policy toward religions. Propagation of various religions was allowed to be held freely, resulting in the change of religious situation in *Xinjiang* from separation between Islam and Buddhism into simultaneous coexistence of various religions.

In the Turpan Basin of east *Xinjiang*, under the rule the Uyghur Kingdom(高昌回鶻王国 Khocho Uyghur Kingdom), Buddhism reached its height of prosperity. The erecting of stone cave temples and the translation of the Buddhist scriptures to Uyghur language were carried out on a large-scale. In the south and west parts of *Xinjiang*, Islam was continuously the main religion though decline occurred to some extent. In north *Xinjiang*, Nestorianism was popular.

The policy of treating all religions equally was maintained in the Mongol Empire. The Buddhist Uyghur people who developed an advanced culture and Muslims who demonstrated the ability in financial economy were promoted to be senior officials regardless of their religious belief, supporting the rule of the Mongol Empire in such a way.

はじめに

新疆のコムル (Qomul クムル Kumul、ハミ「哈密」Hami) から仏教徒勢力が最終的に駆逐されたのは1513年で、ここに新疆(東トルキスタン)のイスラム化はようやく完成したのであった¹。それはまさに「ようやく」という表現があてはまるほど、予想外の時間がかかった。10世紀半ばに新疆にイスラム教が伝来してから500年もの期間を要したのであった²。

12世紀前半に、カラキタイ(西遼、1132~1211年)という非イスラム教徒(仏教徒)のモンゴル人集団によって、イスラム王朝カラハン朝が中央アジア東部から追い払われて以後の約200年間、シルクロード中央部におけるイスラム教の支配は最大の困難に直面していたのである³。カラキタイ及びモンゴル帝国下でイスラム教は他の宗教の拡張によってシルクロードにおけるその卓越した地位を喪失したからであった。

それまでは中央アジアにおけるキリスト教、マニ教、仏教はイスラム化の進展によって明らかに防衛的な状況に陥っていたが、カラキタイ及びモンゴル人による支配はこの傾向を逆転させた。少なくとも一時的にはイスラム教を防御側に追いやった。イスラム教にとっては停滞・困惑の時代となった。その象徴的な事例が、カラキタイ及びモンゴル帝国という非ムスリム国家によって、中央アジアにおけるイラン・イスラム文化の中心地となっていたサマルカンド(Samarqand)とブハラ(Buxoro, Bkhara)が征服され破壊されたことであった⁴。中央アジアにおける、このイスラム教の後退は2世紀に及び、モンゴル帝国支配下の13世紀にはキリスト教、仏教、イスラム教の間での競合が頂点に達した。

1 小松久男編『新版世界各国史4 中央ユーラシア史』山川出版社、2000年、170頁。

2 カラハン王朝によるイスラム教の新疆流入については、拙稿「カラハン朝と新疆へのイスラム教の流入」『文教大学国際学部紀要』第18号第2号、2008年1月、51~66頁を参照。

3 R.C.フォルト著(常塚聡訳)『シルクロードの宗教：古代から15世紀までの通商と文化交流』(原著は1999年刊)、教文館、2003年、167~168頁。

4 両都市とも1220年にモンゴル帝国の征服を受けて破壊され、一時荒廃する。とくにチンギス・ハン軍に破壊されたサマルカンドの旧市街は再建されることなく、今日「無人の丘」アフラシアブAfrasiab遺跡として残されているのみである。1370年に政権を獲得したティムールによって、破壊された旧市街の西南に新しいサマルカンドが建設され、再びかつての栄光を取り戻したのであったが、その間の150年間サマルカンドは復興されなかったのである。現存するサマルカンドの古い建築物はほとんど例外なくティムール時代以後のものである。

本稿では、まずカラキタイとモンゴル帝国の宗教政策をみる中で、テュルク遊牧民に伝統的なシャマニズムの宗教観を検討する。続いて、モンゴル帝国期の新疆各地（東部・西部・北部）の宗教状況を探り、最後にその後の新疆イスラム教の歴史に大きく関わることになるチャガタイ・ハン国の歴史についてみる。

1 モンゴル帝国の宗教寛容政策

(1) テュルク遊牧民の宗教観

モンゴル高原からジュンガル草原、カザフ大草原（ステップ）に住む遊牧民は古代より、しばしば「テュルク」（突厥）と総称された。遊牧民であったテュルクは、その精神生活において広くシャマニズムshamanismの宗教観・世界観を共有しており、諸宗教に対して寛容であった。かれらは草原の伝統に従い、すべての宗教に潜在的な価値を見いだしていた。カラキタイ（契丹）もモンゴルもそうした遊牧民の一つであった。

一般的にシャマニズムの世界観は、至高神である天空神＝テングリ（天・神、tangri）に関するある種の曖昧な概念によって特徴づけられる⁵。そして、テングリといった神仏や精霊と意のままに直接交流する力能を有し、トランス状態となって託宣や予言、病気治療などを行う呪術的職能者（シャーマン、「ボー」とか「イドガン」と呼ばれている）の介在を特徴とする宗教形態である。それゆえに、霊的な事柄であっても、それを「信仰に関すること」というよりも、食料の獲得、戦闘での勝利、健康などといった日常的なことに對する実用性や有用性と結びつけて理解していた。そのため、それが当座の要求を実現させる役に立つのであれば、どのような宗教的实践に対しても開放的であった。このことは、宗教的無関心と表現できる程度のある種の宗教的寛容、つまりどのような宗教であっても少なくともそれが役に立たないと証明されるまでは、潜在的に有用なものと思なされるという状況を生み出した。事実、何代にもわたってモンゴル帝国のハーン（皇帝）は繰り返しキリスト教、イスラム教、仏教、道教それぞれの宗教の代表者に対してハーンのために祈るよう求めた。モンゴルの支配階層はしばしば、これらすべての宗教に対して礼拝施設の建造や宗教的な供え物の献納などを通して支援を与えてきた。

モンゴル人の宗教に対するもう一つの態度は、宗教を特定の共同体に固有のものとしてとらえる傾向があったことである⁶。それゆえ、モンゴル人たちによる支配が正当なものであると住民から見なされなければならないと考えるようになると、チンギス・ハーンはその支配地域の宗教指導者と親交を深め、聖職者と良好な関係を築くことがその下にいる民衆との良好な関係を築くことになると考えた⁷。かように、モンゴル人の宗教に対する態度は統治上の必要性という実用的な理由に基づいていた。

北カスピアン地方の遊牧国家ハザル（Khazar）は、テュルクの中で最も早くイスラムを受け入れた（737年）とされる。が、ハザルはその後、シルクロードの重要な北の支流を支配することによって、東洋と西洋との仲介者としての位置に立つことになる。ユダヤ人商人の宗教的な中立性に伴う商業上の利益を認めて、ハザルの上流階級は9世紀初頭ユダヤ教を受け入れた。が、ヴォルガ河口にあっ

5 テングリという言葉は、インドやイランの諸神、キリスト教の神、マニ教の諸神性を呼ぶのにも使われ、イスラム化以後はアッラーやホダーを示す語として用いられた。今日も「神」を指す語として、現代ウズベク語やウイグル語の「タングリtangri」、トルコ語の「タンリtanri」として継承されている。『中央アジアを知る事典』平凡社、2005年、371頁。

6 Devin DeWeese, *Islamization and Native Religion in the Golden Horde*, State College, PA: Pennsylvania State University Press, 1995, pp100-101. 前掲書『シルクロードの宗教』173頁、より重引。

7 Morris Rossabi, *Khubilai Khan: His Life and Times*, Berkeley: University of California Press, 1988, p7. 前掲書『シルクロードの宗教』173頁、より重引。

8 前掲書『シルクロードの宗教』158頁。『中央アジアを知る事典』423頁。

た首都のイティルにはそれ以外のさまざまな宗教の裁判官もいた。最高権力者のハカン（君主）は住民の大多数と同様、その元来のテュルク的なシャーマニズム的な宗教にとどまっていた⁸。

ハザルに服従していたヴォルガ河流域に住むテュルク系遊牧民のブルガル（ブルガルBulgar）の首長アルミシュ・ブン・ヤルトゥワールは、10世紀初頭に宗主国ハザルからの独立を目指して、イスラムを正式に受け入れてアッバース朝の支援を受けようと考へ、指導者の派遣をバグダードのカリフ、ムクタディル（在位908～932）に要請した。カリフの使節団は921年に出発した。その時一行に加わってブルガルに旅立った一人がイブン・ファドラーン（Ibn Fadlan）であった。かれが書き残した『旅行記（リサーラ）』は、テュルクたちの信仰について次のように伝えている⁹。

「私は彼らが『アッラーの他に神はなし。ムハンマドはアッラーの使徒なり』を唱えているのを聞いたが、それとて格別その文句を信じているのではなく、彼らの所を通るイスラム教徒に近づかんがために、ただその言葉を口にするのである。」

イブン・ファドラーンは、テュルクたちがイスラムの教義を理解することなく、ただ信仰告白の儀礼をまねているにすぎないと批判的に記述している。たしかにテュルクたちがイスラムを受け入れた要因として、イスラムを単なる宗教ではなく、高度な都市文明と受けとめ、ムスリム商人がもたらす豊かな産品に惹かれていたことが大きかったのである。

ほとんどイスラム化している中であってもシャーマニズムは現代でもオアシス民の日常生活の一部として根強く存在しているとされる。旧ソ連の学者バシロフは「中央アジアとカザフスタンにおいては、シャーマニズムはムスリムの装いをまとっている。シャーマン（霊能者）たちの世界観は正統ムスリムのそれと異なっていない。シャーマンは儀礼を行うときに、最初にアッラーへの祈りを行い、次にさまざまなムスリム聖者へ、そして最後にクルアーンにもよく言及される援助霊へ祈りを捧げる」と述べ、ウイグルのシャーマンも同じことを行なっていると指摘する¹⁰。

中央アジアのイスラム文明を研究しているフロリダ州立大学のリチャード・フォルツも、その著『シルクロードの宗教』で、中央アジアにイスラム勢力が進出し政治権力を樹立したことが中央アジアのイスラム化の第一の要因（前提）であるが、イスラム教徒がアジアを連絡する通商活動の大半（当初はシルクロードの西半分だけだったが）を支配し商業利益を握ったことが第二の大きな要因となったと指摘している¹¹。

(2) カラキタイの宗教寛容政策

カラキタイもモンゴル帝国も、上述したテュルクの草原の伝統に従い、すべての宗教に対して不干渉政策（宗教寛容政策）を実施した。

1130年にエミル（「葉密立」、現新疆額敏県）を拠点に樹立されたカラキタイはその後、東西のカラハン朝や中央アジアの諸族を征服し、さらに天山ウイグル王国（高昌回鶻）を臣服させた。こうして、カラキタイは東はモンゴル高原のトラ河（「吐拉河」）、西はホラズム海（Xorazm, Khwarazm「花刺子模海」、現在のアラル海「咸海」）、南はクンルン（昆侖）やカラクンルン山脈、北はバルハシ湖（「巴爾喀什湖」）以北に及ぶ、広大な地域を領域とした。

9 堀川徹「中央アジアのテュルク遊牧民」『アジア遊学』No.30「特集・イスラムとの出会い」、勉誠出版、2001年8月、60頁。原著の日本語訳としては、家島彦一訳註『イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガル旅行記』（1969年）があるが、10世紀初めに中央アジアにいたテュルク系諸族に関する最も詳しい資料として重要である。

10 『中央ユーラシアを知る事典』241～242頁。

11 前掲書『シルクロードの宗教』150～151頁。

広大な領域に及んだがゆえに、カラキタイは多くの民族を支配することとなった。主要なものは、契丹（キタイ）、漢人、ウイグル（回鶻）、カルルク（葛邏祿）、ヤグマ（様磨）、タジク（塔吉克）、ソグド（粟特）、チベット（吐蕃）、モンゴル（蒙古）の諸部族だが、このほかに西アジアから来たアラブ人、ペルシア人、シリア人、ユダヤ人等がいた。宗教状況も非常に複雑で、イスラム教、仏教、道教、景教（ネストリウス派キリスト教）、祆教（ゾロアスター教）、マニ教（摩尼教）、シャマニズム（薩満教）等の信徒がいた。その中では、イスラム教と仏教が信者数の最も多い、影響の大きな二大宗教であった。

領域の広大さ、支配民族の多様性、宗教信仰の複雑さという3つの特徴は、カラキタイの国家統治のあり方を規定した。その国家は、多様な在地勢力や中小の地域権力の上に浮かぶきわめて緩やかな統合型権力であった。宗教政策の面では、カラキタイは自分たちの信仰していた仏教¹²を国教とすることも強制することもせず、他の宗教を容認してきた伝統を継承し、各宗教を一視同仁とみなして差別せず自主に任せるという宗教寛容政策を採用した。

カラキタイは、イスラム教が中央アジアや東トルキスタン（新疆西部）に定着して数世紀が経ってから、ここに樹立された最初の非イスラム政権であった。したがって、カラキタイにとっても、イスラムの伝統が強いこの地域を統治する上で、イスラム教徒との関係をどう処理するかは重大問題であった。カラキタイの宗教寛容政策は、各宗教の大小にかかわらず平等の地位と権利を享有させるもので、国教は定めず、またいかなる宗教も尊大となることを認めないものであった。これは、イスラム教にとっては、これまでに築いてきた独尊的地位を失わせるものであった。この政策はイスラム勢力の膨張を抑止し、政治への干渉を防止するとともに、住民の大多数を占めるムスリムとの衝突を生み出さない賢明な政策であった。

のち1212年にクチュルク（「屈出律」）がカラキタイの王権を篡奪すると、この宗教寛容政策に変更を加えた。彼はイスラム教に対して高圧的政策を採り、ムスリムたちにイスラム教を放棄して他の宗教に改宗することを強制し、ムスリム民衆の強烈な不満と反抗を惹起した。

(3) チンギスによる宗教寛容政策の復活

チンギス・ハーンは中央アジアを征服すると、カラキタイの宗教寛容政策を踏襲し、それを復活させた。チンギスは、一切の宗教は尊重すべきで、偏愛されてはならないと自ら規定し、それを「法令」とした（モンゴル語ではジャサ *jasag*、ウイグル語やペルシア語ではヤサ *yasa*, *yaşaq*）。イスラム教を受け入れるまでの間、モンゴルの支配者は基本的にこの政策を維持していた。それに違反するものは、誰であろうと罰せられた。次のエピソードはその宗教寛容政策の厳格さを示している。

『世界征服者の歴史』¹³によれば、イスラム暦650年（西暦1252/53年）にウイグル王（畏兀兒亦都護）のサランディ（「薩命的」）はウイグル貴族らと謀って、金曜日の礼拝時をねらってウイグル王国の都ビシュバリク（「別失八里」）や王国の他の地方のムスリムたちを一挙に殺害して、彼らの財産を奪い、子女たちを強奪しようとした。まもなくこの「仏教徒」によるたくらみが露見し、ムスリムたちを恐怖に陥れた。ビシュバリクのモンゴル監治官サイフ・ウツ・ディーンはこれを知ると、ただちにハンの宮廷（「汗廷」）に報告した。モンケ・ハーン（蒙哥汗）はこの一件を非常に重視し、自ら審理し真相を明らかにした後、サランディは「高昌回鶻」の首領であったにもかかわらず、彼をビシュバリクに護送して公衆の面前で処刑するよう命じた。共犯者のモンゴル貴族やウイグル人行政官たちもそれぞれに処罰された¹⁴。

12 カラキタイは遼帝国期に漢文の「契丹大藏経」を刊行したことがあるほどの仏教信者であった。

13 イル・ハン国初期、ホラーサーン地方の名族ジュワイニー家のアラーウッディーン・アターマリク *Ala-ad-Din Ata-malik Juvaini* は自身2度モンゴリアに旅行した経験を持ち、モンゴルの歴史をペルシア語で初めて記録した『世界征服者の歴史』（タリーフ・イ・ジャハーン・グシャーイ）を著した(1260年)。

14 馬品彦、趙榮織著『新疆宗教史略』ウルムチ・新疆大学出版社、2001年、50頁。ドーソン著（佐口透訳）『モンゴル帝国史2』平凡社、1968年、292頁。同書は、国王の過酷な政策に怨恨をいだいていたイスラム教徒による国王打倒の陰謀であったらうとしている。

とはいえ、実際にはハーンの好みによって偏愛の傾向も見られた。第二代ハーンのおゴデイは「中国におけるムスリム共同体の保護者」としてイスラム教徒からは評価されていたのに対して、兄のチャガタイはイスラム教徒に反感を抱いていたことで知られ、第三代のグユク・ハーンはネストリウス派キリスト教に好意を持っていたのである。第四代のモンケ・ハーンになると、ふたたび典型的なモンゴルのやり方でそれぞれの宗教がどのような力を示すかという視点から平等に扱うという政策を採った。モンケは先代のグユク同様、キリスト教・イスラム教・仏教指導者の公開討論会を開き優劣を競わせることを好んだ（が、かれ自身は次第に仏教への傾倒を示した）。

元朝の創始者となった第五代のフビライ・ハーンの宗教政策は、利用しうるものにはすべて開かれた態度をとるというモンゴルに典型的なものであった。マルコ・ポーロが伝えているフビライの言葉は彼の宗教に対する姿勢を端的に示している。すなわち、

「礼拝され全世界で崇拜されている預言者は4人いる。キリスト教徒は神とはイエス・キリストであると言う。サラセン人はモハメットだと、ユダヤ人はモーゼだと、偶像崇拜者（仏教徒）はそれは初めて神を偶像の姿で現した釈迦牟尼だと言う。私はこの4者をもとに崇敬し崇拝する。それによって私は天においてもっとも偉大でもっとも真実な者に間違いなく敬意と崇拝を送り、ひたすらその庇護を祈るものである。」¹⁵

カラキタイとモンゴル帝国・元朝の支配期、多様な宗教が併存していた東トルキスタン（新疆）においても、こうした厳格な宗教寛容政策が基本的には実施され各宗教の存在を許容したため、比較的平等な条件での各宗教間の自由競争と発展がみられた。各宗教の自由な布教活動は、それまでの新疆での宗教分布がイスラム教と仏教の境界線が明確だったという状況から、仏教・イスラム教・キリスト教・マニ教そして当地伝来のシャーマニズム信仰などがそれぞれ様々な程度に混じり合いながら存続するという多宗教の同時混在状況に変えた。

2 新疆東部の宗教状況：西ウイグル仏教王国

新疆東部ではモンゴル帝国のもとに西ウイグル王国（天山ウイグル王国）が存続し、主に仏教が信じられており、高昌（現在のトルファン [[吐魯番]] 付近）がその中心であった。それゆえ、しばしば「高昌ウイグル王国」（高昌回鶻）と呼びならわされている。

(1) 西ウイグル王国におけるマニ教と仏教

ウイグルはもともと漠北のウイグル遊牧帝国期の763年に、ソグド商人の影響を受けてマニ教を公式に受け入れていた。840年の遊牧帝国崩壊後に天山方面に移って10世紀初め頃に「天山ウイグル王国」を建国したウイグル人たちは、やがてジュンガル草原から天山山脈を越えてタリム盆地のオアシス都市文化にもなじみ、東西貿易（シルクロード交易）の利益を握るとともに農耕にも従うようになった。それと同時に、かれらは宗教面でもマニ教のほかキリスト教（景教）や仏教を受容した。そして印欧語族の原住民と混住する中で、住民を次第にトルコ化させた。

トルファン盆地の原住民は一種の印欧語である「トカラ語甲種（A）方言」を操る「車師人」であった。またトルファン盆地にはソグド人（「粟特人」）も多く居住していた。焉耆（カラシャール）や亀茲（クチャ）地区の住民も「トカラ語」を操っていた（焉耆人は「甲種（A）方言」、亀茲人は

15 マルコ・ポーロ（愛宕松男訳注）『東方見聞録1』「第三章 フビライ・カーンの宮廷事情」平凡社〈東洋文庫〉、1970年、188頁。

「乙種 (B) 方言」を話していた)。この両オアシス地域とも経済文化が高い発展水準にあり、タリム盆地北縁の著名な「城郭之國」であった¹⁶。

ウイグルの王族はモンゴル高原の遊牧時代に導入したマニ教をもこの新たな王国に持ち込むとともに、トルファン盆地にいたソグド人のマニ教徒らを当初は保護・育成した。トルファンのマニ教寺院跡からは、マニ教の壁画や、多くの挿絵がはいった突厥語のマニ教文献 (福音書、賛美歌、懺悔文など) が発見されている。

が、ウイグル人たちは10世紀末以降はすでに土着の伝統となっていた仏教への帰依を深めていった。焉耆地域で発展していた仏教は、ウイグル王国の中心地域内 (トルファン盆地とビシュバリク) に加えて、東はハミ、西はクチャ地域のウイグル人に継承されていった。10世紀末より11世紀初頭にかけて「龜茲回鶻」が「高昌回鶻」を併合しタリム盆地全域を支配した時期もあった。

カラキタイとモンゴル帝国期も、高昌ウイグル王国 (高昌回鶻汗国) では依然として仏教が盛んであった。当時は国内に、高昌・ビシュバリク・クチャの3つの仏教センターが形成されていた。その中で高昌が最も盛んであった。11世紀初頭にイスラム教との宗教戦争に敗れて、タリム盆地の西部 (カシュガル) と南部 (ホータン) から仏教勢力がしだいに退けられていくと、高昌がホータンに代わって新疆仏教の勝地となった。高昌王国内で仏教は重要な地位を占め、僧侶は多くの政治的経済的特権を獲得し、マニ教の僧侶に完全に取って代わり、王国の重大な世俗的活動や宗教活動に参加し、時には国王 (「カガン (可汗)」) の代表として使いをつとめることもあった。

982年に宋朝の使臣王延徳が高昌王国を訪問した際の見聞録『使高昌記』は、高昌王国の宗教状況について次のように記述している。すなわち、

「トルファン盆地の高昌には仏教寺院50あまりが保たれ、唐朝から賜った額が掲げられ、『大藏経』『唐韻』『玉篇』『経音』などの漢文書籍があり、また勅書楼がおかれていた。仏寺以外に、マニ教寺院やペルシア僧もいて、その宗教を護持しており、そこでは仏典はいわば外道と見られていた。」(『宋史』巻490「高昌伝」)

王延徳が訪れた頃は、仏教は現地ではまだ「外道」と見られており、必ずしも主要な宗教ではなかったようである。が、近代になってから、トルファンでは仏教寺院跡がたくさん発見・発掘されていることから、仏教の流行を確認することはできる。そのほとんどの寺院は回鶻人 (ウイグル人) が建てたものであったし、ウイグル人が仏教を受け入れる前の寺院も、のちにウイグル人に活用された。高昌古城 (トルファンから南東46km) だけでこうした仏寺跡は5ヶ所ある。

ウイグル王の夏宮 (夏都) ビシュバリクでも多くの寺院が建立された。ビシュバリクの北庭古城のそばの西大寺には仏教説話の一場面を描いた壁画が残されている。これらの寺院は王室の所有、あるいは王室と密接な関係があった。当時のウイグル王室や貴族たちは競って寺院に布施したり、寺院の建立や仏像の製作をおこなったり、また人を雇って写経をやらせたりした。かれらはこれらの宗教的功德によって死後に天国に昇ることを願っていた。10～13世紀に開削された石窟寺 (ヤルフ [雅爾湖] 石窟寺、吐峪 [トヨク] 溝石窟寺、ベゼクリク [柏孜克里克] 石窟寺 [千仏洞] など) や寺院 (七星格寺院、勝金口寺院など) には、ウイグル文字の題字がたくさん残されている。またウイグルの仏教徒も仏教壁画 (誓願図が多かった) を描くことが好きで、新しく建立した寺院や石窟の中に壁画を制作したり、マニ教寺院だったものを仏教寺院に改装し、マニ教の壁画の上に石灰を塗って、その上に仏教の壁画を描いたりした。

16 耿世民「高昌回鶻王国」、耿世民著『新疆文史論集』北京・中央民族大学出版社、2001年、230頁。

(2) ウイグル語仏典の翻訳

このようにウイグル王国では最初から仏教は盛んで、新しく用い始めたソグド文字（アラム文字起源のシリア文字）系のウイグル文字を駆使して、先住民の「トカラ（トハラ「吐火羅」）」語や漢語からの東西の典籍の翻訳作業が大に行われた¹⁷。ウイグル文字で書かれた文書は内容的に、①マニ教関係、②キリスト教（シリア系統＝ネストリウス派）関係、③仏教関係、④法律関係に分かれるが、この中で③のウイグル語仏典が最も豊富である。大谷探検隊が西域（新疆等の中国西北地域）からもたらした文書のなかにはウイグル文字文書がきわめて多数あり、現在その一部が龍谷大学に保存されている。

ウイグル語仏典の由来は3つある。早期のウイグル語仏典は、当地の古代クチャ語・古代焉耆語、いわゆる「トカラ語」から翻訳されたもので、「聖月大師がインド語から古代焉耆語にした」という『弥勒会见記』がその代表的なものである。この仏典はドイツのトルファン探検隊のバルトゥスが1906年に発見したもので、今日ベルリンのドイツ科学アカデミーに保存されている。のちには多くの仏典が漢文より訳され、『金光明最勝王経』『俱舍論安慧実義疏』（この漢文原本は伝わっていないという）、『天地八陽神呪経』『玄奘伝』などがある。元代になると、チベット文より翻訳されたウイグル語仏典が出てくるが、その多くは密宗のものであった。

イスラム教勢力によるトルファン盆地の征服後、ウイグル語仏典は古代語の仏典を含めて壊滅的な破壊を被った。近代になって出土したウイグル語仏典は破壊後のわずかな残存物にすぎない。しかし、われわれは現在、幸運にも残った一部の仏典から、当時のウイグル人の仏典の翻訳作業の規模を理解することができる。それは大蔵経すべてとは言えないとしても、少なくとも大蔵経の経部（経典）・論部（経典や戒律の解説書や教義書）の主要著作がウイグル語に訳されたと言うことができるほどのものであった。今日は律部（戒律）も少数ながら発見されているが、律部の著作がほとんど見られないのは、当時のウイグル語仏教界ではある種の寺院語（たとえば梵語や古代クチャ語・古代焉耆語）で戒律について学んだり朗読したりすることが流行していたからではないかと、中国の古代突厥研究者耿世民は指摘している¹⁸。

ウイグル語仏典の分析からは、9世紀頃から「トカラ」人が持っていた弥勒信仰が未来に現れる仏としてウイグル人に広まったこと（上述の『弥勒会见記』の翻訳や弥勒仏塑像の中心木の文字からも指摘できる）、『阿弥陀経』（Abitaki nom bitigi）の翻訳から仏教の中では浄土宗が内地の漢人と同じようにウイグル人の中でも流行していたことがうかがえる。また、上のものが民衆に対して持つべき義務を強調する8世紀の漢文偽経『天地八陽神呪経』（大谷探検隊が将来した）や、義浄漢訳の『金光明最勝王経』、漢文『玄奘伝』がウイグル語に翻訳されて流布されたことなども注目されることである。

著名なウイグル人訳経僧（仏典翻訳大師）や回鶻仏教大師の存在も知られている。たとえば、仏学以外に漢学にも精通していたアンザン（「安藏」）、漢文・蒙古文・チベット文字・梵文に通曉し、『羅嚴経』を漢文からウイグル文に翻訳するとともに多くの梵文訳経をもっていたピランナジリ（「必蘭納識里」）、蒙古文・チベット文・梵文および顕教・密教に通曉していたカルナダス（「迦魯納答思」）らであった。中には中国内地の漢文大蔵経の整理工作に参加したものもいた¹⁹。

このように、大乘仏教や浄土信仰に関する多くの経典のほか、敦煌出土品を含めてみれば、論書類におよぶ多量の写本が生み出された。またオアシス縁辺の石窟寺院の改修・保護、高昌城内のマニ教寺院の改造やビシュバリク郊外の寺院をはじめとする仏教施設への寄進などを通じて、定住地の仏

17 中央アジアのテュルク人の間では、イスラム教が普及するにつれて、ウイグル文字は次第に使用されなくなり、アラビア文字と置き換えられてしまった。当時のトルファンは、ドイツの探検隊がここで17種類の言語を24種類の文字で書いた文書や経典を発見したことからうかがえる通り、多民族多宗教があたりにまにに共存していた地であった。

18 耿世民「古代新疆和突厥、回鶻人中的佛教」、耿世民著『新疆文史論集』北京・中央民族大学出版社、2001年、276頁。

19 耿世民「古代新疆和突厥、回鶻人中的佛教」、275頁。1348年に元の世祖による開版がなされている（『元蔵大蔵経』6017巻）。

教徒としてのウイグル人の姿は明確なものになった。ウイグル人の仏教に対する敬虔な信仰はホータン李氏王朝とカラハン朝の宗教戦争に際してホータンの仏教徒の側に立ったことに示されている。またカラハン朝の高昌に対する「宗教戦争」に対しても、ウイグル仏教徒たちが侵入者を撃退し自己の信仰と仏教文化を守ったことは、仏教が高昌王国のウイグル人の間にしっかりと根付いていたことを示している。

上述の仏典翻訳（訳経）は漢文からのみでなく、チベット文やトカラ文からも翻訳されているが、その難度は非常に高いもので、ウイグル王国の仏典翻訳人材の多士済々ぶりと識字能力の高さを示している。こうした識字能力の涵養は、中央アジアの複合文化の集大成とも言えるものであった。それほどまでに、ウイグル人の商業・文化ネットワークは広く深い土壌を持っていたのである。こうして、14世紀にかかる頃まで、マニ教、キリスト教、仏教関連の諸経典（もっとも多くは仏教写本であるが）だけでなく、商品リストや手紙、受領書、各種経済文書、行政文書がウイグル語で作成され続けた²⁰。

(3) モンゴル帝国とウイグル文化

天山ウイグル王国は12世紀前半にカラキタイ（上層人士は仏教を信仰）に服属していたが、13世紀初めにチンギス・ハーンが立つと、いち早く国王（主長イドゥククト「亦都護」）のバルチュク（バルジユク）・アルト・ティギン（Barcuk Art Tegin「巴爾術忒阿的斤」、ティギンはテュルク族における王号）は、1209年から1211年にかけての使節往復の間に、チンギス・ハーンの仇敵メルキトの残党をイルティシュ川方面で討ち、またカラキタイの代官（監国、総督）をカラ・コージャにおいて殺して、チンギスに進んで帰順したため、本領を安堵され、その半独立的地位と王統を保った。チンギスはウイグル王に娘（也立安敦、アルトゥン・ベギ）を与え、「第五の子」と呼んで王家の一員とした。これに続き、天山西部北麓の遊牧民カルルク（カヤリク王アルスラーン・カンとアルマリクの王オザル〔プザル〕）もカラキタイを見限ってモンゴルについた。モンゴル帝国形成の最初期にあって、この関係はウイグルとモンゴル双方に大きなメリットを与えた。

モンゴル治下における、このウイグル王の地位は以後14世紀後半になっても少なくとも名目上は変わることなく保証され、歴代のウイグル王はモンゴルや元朝の皇帝から「イドゥククト」の称号と高昌王の名義および金印の一部またはすべてを賜授された。モンゴル王族の王女を娶るウイグル王が他にも確認され、ウイグルにとって新興モンゴルの軍事力は強力なうしろだてとなった。モンゴルとの関係によっても、ウイグル王国内部の伝統的な生活方式や宗教は大きな影響を受けることがなかった。ただこの時期にチベット文の仏典がウイグル語に翻訳されたことにみられるように、チベットの仏教＝ラマ教がモンゴル帝国期の高昌の仏教に一定の影響を与えていたことを見ることができるだけである。

他方、ウイグル文化はすでに草原のテュルク系集団にも伝わっていた。文字や定住地の統治システムを持たなかったモンゴル政権にとって、ウイグルのこうした文化はその後の定住地域を占領し都市を統治していく上で大きな支えとなったはずである。ウイグル文字はモンゴル語表記に採用され、読み書きに堪能な彼らに活躍の舞台を提供することとなった。ウイグルはモンゴル軍事国家のいわば「頭脳」として、またイラン系ムスリム集団と並ぶ商業勢力として大きな役割を果たすようになる。モンゴルとウイグルの集団的な共生関係は急速にうち立てられたのである。軍事面でも、チンギス・ハーンのホラズム遠征（1219年）やタングート（西夏）攻撃にバルジユク王は他のウイグル人部隊と

20 小松久男編『新版世界各国史4 中央ユーラシア史』山川出版社、2000年、136～139頁。

ともに参加したと伝えられる。

文化水準の高いウイグル国人はモンゴル帝国内で重用され、政治家・文人・軍人として今に名を伝えているものがきわめて多い。たとえば、1235年に首都カラコルムが建設されモンゴル帝国の実務機構が整えられていくが、ハーンの命令を文書化し、また財務全般にかかわる帳簿を管理した書記局の首班（首席の宰相となる中書右丞相）にはウイグル人（ケレイト人ともいわれる）のチンカイ（チンハイ Chingai、鎮海）が任命された。すでにチンギスがナイマンを征服したとき、ナイマン部のタヤン・ハンに顧問として使っていたウイグル人のタタトゥングを捕虜とし、彼からウイグル文字で記された玉璽を手にしていった。タタトゥングはまたその命によって王子たちにウイグル文字やウイグル王国の法制・慣習を教えた。このウイグル文字はやがてモンゴル帝国の文字に採用され、今日まで伝わっている。それ以後も、ウイグル人は元朝一代を通じて大都や雲南にまで、人的な面でも仏教の面でも広いネットワークを保ち、いわゆる色目人として中華内地にはいり、元朝の軍事・財政統治を支える者も少なくなかった²¹。

（4）ウイグル王国の消滅

が、モンゴル皇帝を最高権力者とするモンゴル帝国下で、イデウクトの統治能力と権威はしだいに弱まった。1266年のハイドゥ（カイドゥ）の乱は天山ウイグル王国の命脈を断ち切った。モンゴル内乱に巻き込まれて、西ウイグル王国の国勢は傾き、王族のコチガルはビシュバリクから高昌（火州）に退きながらもここを拠点に勢力増強を図ったが、結局フビライの財政・軍事援助を受けざるを得ず、この地は軍事上の要地として元朝の直轄地的扱いを受けた。さらにチャガタイ＝ハン国が独立すると、1275年には高昌城がドゥアの軍に包囲されたりした。この時は何とか高昌城を維持したものの、次王ニギユリンは1280年すぎにはトルファン盆地を後にし、難を甘肅の永昌に避けて、1318年にここで没した。歴代ウイグル王の世勲碑がトルファンではなく甘肅の武夷地方に立てられているのは象徴的な出来事である。

ハイドゥの乱に禍されて、天山ウイグル王国の故地トルファンとタリム盆地は、チャガタイ＝ハン国の領域内に含まれ、ウイグル人の政権は完全に消滅し、過去4世紀来の所領を喪失した。それでもウイグル農民たちはトルファン盆地に住み続けた。

ところが、14世紀には、タリム盆地の各オアシスに混住・混血しながら住み続けた一般のウイグル人たちも、一部の仏教徒が甘肅方面へ脱出せざるを得なくなるような時代の趨勢、すなわちイスラムの本格的な東進、イスラムに改宗した東チャガタイ勢力（モグリスターン・ハン勢力）の拡大を待ち受けることになるのである。

3 新疆西部・南部の宗教状況：イスラム世界

新疆西部・南部では、モンゴル帝国下においても引き続きイスラム教が流行し、カシュガル・ホータン（和田）を中心に、南はタリム盆地の南縁（ヤルカンド、シャチョ、ホータン、且末）から東はロブ（現在の若羌）一帯 [いわゆる「西域南道」] に及び、北はタリム盆地北縁のアクスとクチャ間に達していた。クチャは当時はまだ仏教を保っていた。13世紀初めに、カラキタイの末代君主クチュルクがムスリム達にイスラム教の信仰を放棄するよう強制した時、ホータン（和田）のイマームが理詰めで論破したといわれているので、イスラム教がすでにこの地域にいかに強く根付いていたのかを

21 前掲書『中央ユーラシア史』139～142頁。佐口透編『東西文明の交流4 モンゴル帝国と西洋』平凡社、1970年、91頁は、「ネストリウスのウイグル文化が、ナイマン王国を通じてチンギス・ハン政権に書記・書写語の技術と知識を与えた文化的影響力は大きい」と述べる。

理解できよう。

モンゴル帝国の宗教寛容政策は、当然のことながら東トルキスタンにおけるイスラム教にも変化をもたらした。

第一に、イスラム教の布教地域が拡大した。11世紀初めのカラハン王朝による高昌ウイグル王国（高昌回鶻）に対する「宗教戦争」の失敗等により、武力布教の条件を失うと、イスラム教はそれ以上に布教を拡大できなくなった。カラハン王朝と高昌ウイグル王国の国境線がイスラム教と仏教の分水嶺となった。カラキタイの建国以前は、イスラム教はクチャ（庫車）と拝城の一線を越えることはできなかったが、カラキタイの建国後は両地域の境界はなくなり、宗教間の障壁も消滅し、イスラム教は順調に東方に広めることができるようになり、まもなく高昌ウイグル王国内のアクスやクチャなどに平和的に伝わった。もちろん仏教やネストリウス派キリスト教（景教）などの他宗教もイスラム教地域で発展することができたのであるが、これはイスラム教の東トルキスタンへの流入以来、非武力的方法による比較的大規模な仏教障壁の突破であった。

第二に、イスラム教はカラキタイやモンゴル帝国という非イスラム政権下で「適応性の変化」を迫られた。これはイスラム教徒が東トルキスタン（新疆）でこれまで遭遇したことがなかった新しい状況であった。イスラム教上層人士とムスリム大衆はモンゴル帝国の宗教寛容政策を積極的に支持し、初期の敵視的態度を改めただけでなく、破天荒にも各地のモスク（清真寺）で礼拝をおこなう時にモンゴル統治者の名前を唱えさせた（「念呼図白」）のであった。

イスラム教上層人士はカラキタイの支配集団に取り入って、直接その統治に参与し、地方官に代わってムスリムから徴税したり、地方の治安維持に責任を負ったりした。それゆえ、カラキタイの支配期には多くの暴動が発生したが、直接カラキタイに反対するものは多くなかった。ムスリム民衆から見れば、「異教徒」キタイ人（契丹人）の自分たちに対する統治は、「正統な信仰を持つ人」（ムスリムを指す）の統治よりもましであった。暴動が当地のイスラム支配者から鎮圧された時、ムスリムたちはカラキタイ支配者の支持を求めようとさえした。かくも、ムスリム民衆のカラキタイに対する信頼は彼らと信仰を同じくするイスラム支配者を超越するものであった。この時期のムスリム史学者も著作の中でカラキタイ支配者をたたえ、彼らの公正さとイスラム教の教義に対して示された尊重を賞賛した²²。

こうしたイスラム教側の「適応」にもかかわらず、第三に、イスラム教に衰退の現象があらわれた。他の宗教と平等的な扱いを受けたとはいえ、イスラム教は本来持っていた国教としての地位を失ったのであり、内部的な変化を起こさざるをえなかった。他宗教からの衝撃を受けたり時流に流されたりして、あの本来イスラム教に強制的に改宗させられた、あるいは信仰がもともと強固でなかったムスリムたちの信仰はしだいに動揺しはじめ、他宗教に改宗するものも現れた。すでにカラハン朝期の11世紀に、ユースフ・ハーッス・ハジープは『クタドゥグ・ビリグ（福楽の智慧）』（1069年）の中で、ムスリム信仰の衰退と悪しき風潮を嘆いていた。12世紀末から13世紀初めにアフマド・ユクキナーによって書かれたカラハン朝期の哲理的長詩『アタバト・アル・ハカーイク（真理の敷居）』でも、イスラム教のこうした変化が記述されている。

が、カラキタイ末期には、イリ河流域のアルマリク地区（「阿力馬里」）にイスラム化した小王国が出現していた。これは天山山脈を越えて天山北路の遊牧地域にもイスラム教が伝播されていたことを示す初めての出来事である。このとき、アルマリク地区にはスーフィズムのイスラム教を信仰する人

22 前掲書『新疆宗教史略』51～52頁。

がいたと伝えられる。こうして、次第に天山の北部では、昌八剌（チャンパラ、現在のジムサル [[吉木薩爾]]）を境にして、東は仏教地区、西がイスラム教地区という分布が形成されていく。

イスラム教はその後も、チャガタイ汗国で発展を続け、新疆（東トルキスタン）の統治を継承した東チャガタイ・ハン国のもとでイスラム教は新疆西部のカシュガルや南部のホータンから、元朝後期までに天山山脈の南北地域にまでひろまった。

4 新疆北部の宗教状況：ネストリウス派キリスト教の流行

(1) 新疆北部の宗教概況

モンゴル高原西部から新疆北部には、キリスト教が伝えられていたことが知られているが、それ以上に当地の遊牧民たちは伝統的なシャマニズムを保持していた。12世紀のウイグルについての契丹側の記録に「俗は天神に仕える方法で仏法を信じている」とあるように、ウイグルは公的なキリスト教や仏教信仰のなかに草原シャマニズム世界の天神（テングリ）信仰を継承していた。

(2) ネストリウス派の流行

ウイグル人の中にキリスト教（景教、ネストリウス派）が流行していたことは、トルファンの景教教堂（キリスト教会）の遺跡から「聖枝節」（Palm Sunday、復活祭前の日曜日）にキリスト（「基督」）がエルサレム（耶路撒冷城）に入るのを歓迎する儀式を描いた壁画が発見されたという考古学的発見からも確認できる。また、突厥語の景教福音書も出土している。王延徳が述べた「ペルシア僧」はキリスト教の教父を指していると思われるが、あるいはマニ教か祆教の僧侶を指しているのかもしれない。このほか、『伊索寓言』（イソップ物語）のウイグル語への翻訳もキリスト教の流行と関係があると推測される²³。

ネストリウス派キリスト教は、カラキタイとモンゴル帝国期の新疆（東トルキスタン）や中央アジアで最も活発かつ急速に発展した宗教の一つである。グルジア正教会やヤコブ派（単性論者、現在の正式名称は「シリア正教会」で、「アンティオキアおよび全東方総主教」が管轄している）、アルメニア教会、ギリシア派（メルキト派ビサンツ帝国派）カトリックなどキリスト教の他の宗派も活動していた。

モンゴルの中でケレイト部とオングト部、ナイマン部の王族・貴族が11世紀にキリスト教化してまもなく、ギオルギス（ゲオルグ、ジョージ）、アントニウス・ジュアンといったキリスト教名がモンゴル高原中央部のメルキト部やさらに東方のタタール部においても見られるようになった。モンゴルの王室はキリスト教を信奉する克烈部（ケレイト部）の王族と婚姻関係を結んだので、大ハーンの妻や母親のなかにはキリスト教徒がたくさんいた。のちに偉大なハーンとなるモンケとフビライ、そしてイル・ハン国の創始者フラグの三人の母であるソルカグタニ・ベキ（ケレイト部）はネストリウス派キリスト教徒であった（ただ彼女は同様にイスラム教などその他の宗教も支援していたとされる）。フラグの正妃ドクズ・ハトン（ケレイト部）もネストリウス教徒であった

重要なモンゴル帝国の官僚の中にも、たとえばグユク・ハーン（「貴由汗」）の丞相チンハイ（鎮海、ケレイト部出身の「バルジュナの功臣」の一人）やモンケ・ハーンの丞相ボルフたちはキリスト教徒であった。チンギスはいかなる宗教への偏愛をも許さなかったが、キリスト教の影響を受けていたモンゴル帝国

23 耿世民「高昌回鹘王国」、耿世民著『新疆文史論集』北京・中央民族大学出版社、2001年、234頁。

のハーンたちがネストリウス派に好意的であったことは自然なことであり、それがモンゴル帝国・元朝期にネストリウス派が大発展した重要な原因の一つであった。その状況は次のように描写されている。

「ネストリウス派（聶思脱里派）の教会は最大の繁栄と隆盛を享受し、かつ一時は世界の出来事の中の真の要素となった。それはフラグ（「旭烈」）およびその後継者のアバガ（Abaga「阿巴哈」）とアルゲン（Argun「阿魯渾」）らペルシア・ハン（波斯汗、イル・ハン国を指す）の愛護を受けているだけでなく、彼らの宗主フビライ（忽必烈）およびその中国と極東の継承者たちの愛護をも受けている。宗主マール・デンハ（Mar Denha「馬天合」、1265～81年）の指導のもと、ネストリウス派教会の教団組織は再組織され、ペルシア湾やインド洋からカスピ海（「里海」）や太平洋に拡大している。1275年、フビライの新首都カンバリク（Khanbalik「汗八里」）や北京に総主教管区を設けた。中国の多くの主要な都市には、キリスト教の要員あるいはキリスト教を信仰する商人によって教堂が建てられている。」²⁴

(3) 新疆におけるネストリウス派の布教

ネストリウス派の東方での隆盛は、カラキタイとモンゴル帝国が宗教寛容政策を実行したこともあって、新疆地域でもその布教と発展を後押しした。ネストリウス派の宣教師や商人たちは、宗教寛容政策を十分に利用して、天山南北のオアシスや草原を奔走し、積極的に布教活動を進め、教堂を建立した。13世紀半ばまでに、ネストリウス派のキリスト教は、イスラム教が盛んとなっていたカラハン朝の元領域をもふくめて、東トルキスタン各地に広泛に広まった。

当時、ネストリウス派が作成した主教駐在表によれば、あわせて25の管区（大主教区）があり、さらに70の主教区に分かれ、各教区には主教が駐在していた。カシュガルはその中の第19教区であった。中国人学者方豪は元代文献に基づいて、中国の教会所在地51ヶ所を掲出し、そのうち新疆地域にはその約6分の1に相当する8ヶ所があった。その8ヶ所とは、カシュガル（「可失哈爾」）、ホータン（于闐）、哈密、トルファン、ヤルカンド（「也里度」「葉爾羌」）、アルマリク、イリ、輪台である²⁵。これはマルコ・ポーロの記載と大体一致している²⁶。すなわち、

@カシュガル：住民は回教徒以外に、ネストリウス派（「聶斯利派」）のキリスト教徒が少数いる。彼らは自己の教規に従って、自己の教会で礼拝している。

@ヤルカンド：住民の一部分はキリスト教（景教）を信仰し、一部は回教を信仰している。

@シャチョ（莎車）：住民の大部分は回教徒で、ほんの一部がネストリウス派キリスト教徒で、大ハーンに対して臣と称し貢納している。

@チンチタラス（欽赤塔拉斯、現ハミ沁城）：3つの教派の住民がおり、少数の住民はネストリウス派の教義を奉じてキリストを信仰し、2つ目は回教徒で、3番目は仏教徒である。

マルコ・ポーロと同時代の西側の旅行家や宣教師もウイグル人のキリスト教信仰について記述している。教皇インノケンティウス4世によって派遣された²⁷イタリアのペルージア生まれのフランシス

24 道森『出使蒙古記』北京・中国社会科学院出版社、1983年、21頁。前掲書『新疆宗教史略』54～55頁より重引。

25 前掲書『新疆宗教史略』55頁。

26 前掲書『東方見聞録1』「第二章 中国の西北辺境に行く」参照。

27 カルビニの使節団はモンゴル人に洗礼を受けさせて教皇の権威のもとに置くことを目指していたが、同時に将来あるかもしれないモンゴルのヨーロッパへの侵攻についての軍事情報を集めるといふスパイ活動も意図されていた。このことは、ジョンの旅行記が最後の章で旅行の経緯を述べるだけで、あとの8つの章ではモンゴル人の国土、しきたり、宗教、法制、帝国、戦闘、講和、モンゴル人の攻撃、襲来に対抗する手段をあますことなく詳細に報告していることにみられる。オーウェン・ラティモアは皮肉を交えて「当時のCIA（キリスト教情報省）」と呼んだ。前掲書『シルクロードの宗教』177頁。

コ会（「方濟各会」）修道士のプラノ・カルピニのジョヴァンニ（ヨハン・ヨアネス・ジョン）（「約翰・普蘭諾・加賓尼」 Giovanni de Plano Carpini）は「ウイグル人はネストリウス派のキリスト教徒であった」と言っている²⁸。フランスのフランシスコ会（小教友会）修道士ギョーム（ウィリアム）・ド・ルブルク（リュブリュキ）（William of Rubruck「威廉・魯不魯克」 Guillaume Rubruquis）はモンゴル宮廷に赴く途中、1254年カイラク（「海押立」）に立ち寄った際、「あらゆるウイグル人の都市にはネストリウス派教徒がいて、サラセン人（「薩拉森人」、イスラム教徒を指す）と混住し、ペルシア方面のサラセン人の街にも分散して住んでいる」光景を目撃している。かれはさらにウイグル人クリスチャンが手に黒のインクで小さな十字架を書いているが、十字架とイエス＝キリストの像は掲げていないこと、またお祈りの時には両手を合わせず、両手を胸の前に突き出すという不可解な現象も目にした。その理由を問うと、「これが自分たちの風俗である」との答えに接した²⁹。ウイグル人に布教される過程で、ウイグル人の伝統文化や風俗に適應させる同化現象を発生させていた。

東方のキリスト教徒に対するルブルクの印象は肯定的なものではなかった。すなわち、

「この地のネストリウス派教徒は無学である。彼らはシリア語で祈祷を暗唱し、またシリア語の聖書を持っている³⁰。だが、彼らはその言語を知らないで、彼らの詠唱はまるで文法を知らない者のするようであり、このために彼らはまったく墮落している。総じて彼らは高利貸しで酒飲みであり、しかもタルタル人の中に住む者の中にはタルタル人のように複数の妻を持っている者までいる。教会に入る時には、彼らは下半身をサラセン人のするようなやり方で洗い清める〔イスラム教では礼拝前に「ウドゥー」 wudhu(下半身の沐浴)をする]。また彼らは金曜日に肉を食べ、サラセン人のやり方に従って祭日を祝う。……結論として、彼らが仮に尊大なモンゴル人の子を養い、彼らに福音と信仰とを教えたとしても、多かれ少なかれ彼らの不道徳と貪欲さのために、むしろ彼らをキリスト教から遠ざけることになるだろう。」³¹

カトリックのルブルクから見れば異端のネストリウス派に対して批判的な口調になることは当然のことであつたろう。が、当時の西側には、ウイグル人を「ダルサイ」（達爾賽）、「ダルシー」（達爾西）、「タルサ」（塔爾薩）などと呼ぶ人もいた。これらの言葉はキリスト教徒に対する異なる表現であったことからもうかがえるように、当時ネストリウス派キリスト教がウイグル人の中で隆盛し非常に多くの信者が存在していたのである。

(4) テュルク人キリスト教徒

ウイグル人を含むテュルク人の中にはキリスト教を信仰する人が非常に多かったので、当然ながら著名な人物も現れている。チンギスの掌印官タタトンガ（「塔塔統阿」）は「教父をなりわいとなす、あるいはネストリウス派の宣教師なり」と書き残されている。1258年のモンゴル軍によるバグダード占領の

28 カルピニ・ルブルク著（護雅夫訳）『蒙古旅行記』桃源社、1979年、26頁。

29 「ルブルクのウィリアム修道士の旅行記」。『中央アジア・蒙古旅行記』198-199頁。

30 ネストリウス派教会は「東シリア教会」「アッシリア教会」「カルデア教会」とも呼ばれている。正式名称は「アッシリア東方教会」（The Holy Apostolic Catholic Assyrian Church of the East）である。イランのアゼルバイジャン州ウルミエには、1世紀に建てられた、アジアで最初のアッシリア教会「聖マリア教会」が現在も残されている。そこのミサでは、イエス・キリストが使っていた古代シリア語のアラム語（現在は死語）という特別の言葉が今も使われている。今でもアラム語を使うのは、この宗派だけだが、初期キリスト教ではすべてアラム語が使われていた。その名残として、「アーメン」（Amen、そうありますように）や「ハレルヤ」（Hallelujah、神をほめたたえよ）という言葉はアラム語を起源としている。NHK取材班著『大モンゴル 2 幻のプレスター・ジョン／世界征服への道』角川書店、1992年、46～47頁。

31 前掲書『シルクロードの宗教』182頁。『中央アジア・蒙古旅行記』208頁

際には、イスラム教徒は虐殺されたが、キリスト教徒は見逃された。侵略軍の中で最も喜び勇んで破壊の限りを尽くしたのはグルジアのキリスト教部隊だった³²。イル・ハン国を開いたフラグはネストリウス派総大主教[カトリコス・法主]のマール・マキハに宮殿を引き渡し、彼のために新しく聖堂を建てた³³。

元初、カンバリク（大都）のオングト族ネストリウス派教徒ラッパン・パール・サウマー（「拉班・巴・掃馬」）は1278年（至元15年）、内モンゴルの淨州（オングト王城コシャン）出身の弟子でオングト部テュルク人のキリスト教徒マルコス（マルク「馬可斯」）とともに、テュルク系ネストリウス派の都市・豊州（マルコ・ポーロの記述ではテンドック「天徳軍 Tenduc」、現在の内蒙古フホト）から聖地巡礼のためエルサレムへと旅立った。途中イラクのマラーガ城（「馬拉加城」）でネストリウス派総大主教[カトリコス]のマール・デンハ（「馬屯哈」在位1265-81年）の面識を得た。マール・デンハはイル・ハン国（フルグ・ウルス）第二代君主アバガの保護を受けていた。1280年、マール・デンハはマルコスを「カタイ（契丹・中国）とオングト諸都市の首都の総大主教」に任命するとともにヤバラハー（「雅伯拉哈」、神が与えたという意味）の称号を与え、またパール・サウマーを巡察総監（首席監察官）に委任した。翌年マール・デンハが死去すると、新しいモンゴル人支配者との文化的共感のために、ヤバラハーは第58代カトリコス（総大主教）に推挙され、ネストリウス派教会総主教座の所在地バグダードで「マール・ヤバラハー 3世」（在位1281~1317年）に着任した³⁴。外国人が総大主教や首席監察官に任命されたことに嫉妬した二人の高位のシリア人僧侶によって告発されるという陰謀事件も発生した。

のち1287年にヤバラハー 3世は、サウマーがモンゴル語及びヨーロッパの言語ができるという理由で、かれをイル・ハン朝のモンゴル宗主アルグン（フレグ・ウルス第4代君主、在位1284-91年。彼個人はチベット仏教を奉じていた）の欧州諸国への使節に推薦した。パール・サウマーに率いられた使節団はヴァチカンに派遣され、コンスタンティノーブルでビザンツ皇帝アンドロニクス二世と謁見した後、イタリアとフランスに到着した³⁵。

このように、二人のウイグル人クリスチャンの名声はペルシアにとどろいていたのであった。しかし、元朝以後は、イスラム教勢力の伸張とウイグル人のイスラム改宗によって、新疆と中央アジアでのネストリウス派キリスト教は衰退し、ついには消滅してしまった。現在、ネストリウス派はイラク、イラン、シリア、レバノンとロシアの一部に信徒がいるが、長い間バグダードにあった総主教座は20世紀に入ってアメリカのイリノイ州モートン・グローブに移動している³⁶。

5 チャガタイ・ウルスの成立

モンゴル帝国がカラキタイ（西遼）を滅ぼした後、東トルキスタン（新疆）の大部分はオゴタイとチャガタイの所領（ウルス）に編入された。とくにモンゴル帝国下で新疆の南北地域（いわゆる東トルキ

32 グルジアは当初アンティオキア総主教の管轄下にあったが、5世紀に独立教会（「グルジア正教会」）となり、カトリコス（総主教）の座は古都ムツヘタに置かれた。

33 ロバート・マーシャル著（遠藤利国訳）『図説モンゴル帝国の戦い：騎馬民族の世界制覇』東洋書林、2001年、226頁。なお、マールはシリア語で尊称の意である。

34 シリア語で記されている彼の伝記『マール・ヤバラハー 3世伝』が、1887年に中東のクルド地方で発見され、その後校訂・翻訳・注釈がなされ、1928年にイギリスのバッチBudgeによる英訳（The monks of Kubilai Khan, Emperor of China）が出て、これが決定版となった。1932年には日本語訳も出された（佐伯好郎訳補『元主忽必烈が欧州に派遣した景教僧の旅記』春秋社松柏館、1943年刊行）。最初の原文はペルシア語であったとされる。

35 サウマーの西方旅行については、杉山正明著『興亡の世界史 8 モンゴル帝国と長いその後』講談社、2008年の「サウマー使節団のヨーロッパ外交」（240~69頁）がコンパクトに説明している。前掲書『モンゴル帝国と西洋』も参照。

36 『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002年、861頁。『中央アジアを知る事典』414頁。

スタン)を統治したチャガタイ=ハン国は新疆の歴史とイスラム教の歴史に大きく関わることになる。新疆イスラム教の歴史を理解するためにも、チャガタイ・ハン国の歴史をみておく必要があるだろう。

1206年モンゴル高原中央部オノン川の源に近い草原で開かれたクリルタイで即位したチンギス=ハーン(在位1206~27年)は、遊牧民集団を95の集団(千人隊)に再編し、その一部を一族に分与した。3人の息子ジョチ、チャガタイ、オゴデイにはそれぞれ4個の千人隊を与え、モンゴル高原の西に連なるアルタイ山脈西麓沿いに、北からジョチ、オゴデイ、チャガタイの順で遊牧地を定めた(「西方3王家」と呼ばれる)。他方、三人の弟ジョチ・カサル、カチウン(遺児のアルチダイ)、テムゲ・オッチギンには、千人隊がそれぞれ1個、3個、5個ずつ与えられ、東方の大興安嶺一帯に北からカサル、オッチギン、カチウンの順で牧地が定められた。モンゴル高原の中央部にはチンギスと末子トルイに直属する近衛軍団(ケシク)1,000人および左右両翼に配された万人隊、計10万1,000人が固め、その東西辺境に12個ずつの千人隊を擁する一族のウルスを配置したのである³⁷。

(1) チャガタイの所領(ウルス)

第二子チャガタイ(察合台)は中央アジア遠征(1220~25年)ののち、父チンギスより、所領(ウルス)としてイリ渓谷やビシュバリクの天山山脈北麓一帯からイシク・クル湖、タラス、ホージェンド、ブハラ(ボハラ)、サマルカンド地方にいたる草原地帯(いわゆる東西トルキスタン)を受け取った。おおよそカラキタイの故地にあたる地方であった。チャガタイ自身はイリ盆地のアルマリク[現在のクルジャのオールド(幕営)]付近に夏牧地・冬牧地を設けて本拠(「大邸」ウルグ・エヴ

ただ、チャガタイ・ハン国の領域とみられる東西トルキスタンの定住イスラム文化地帯は、チンギス・ハーンからフビライ・ハーンの初期までは大ハンの直轄地で、サマルカンドやブハラなどの大都市に対してチャガタイの直接統治は行われていなかった³⁸。つまり、チャガタイの直接の支配権は遊牧民におよぶだけで、定住地域の徴税権(成人男子に対する人頭税)はモンゴル皇帝が任命した最初の財務長官マフムード・ヤラワチ(ホラズム出身のトルコ系ムスリム大商人)、ついでその子マスワード・ベクの手中にあった。彼らはホージェンド(Khodzhent、レニナバードLeninabad)において、土着諸侯(マリクmalik)や都市の宗教貴族(サドルsadr)を統治し、カラコルムに直属していた。

その代わりに、チャガタイ家は、征服戦争の分け前として、山西の太原、甘粛の山丹、およびビシュバリク、ブハラ、サマルカンド、アルメニアの各地方に分地すなわち食邑(采邑、イスラムのインチュエーに当たる)を有し、代官の手を経て収入をえていた。この仕組みは、緩やかな連合体となったモンゴル帝国の他のウルスでも同様で、中国内部にジョチ家やフラグ家の所有分があったりした³⁹。

チャガタイの宮廷(オルドordo)では、クトゥブ・ウッディーン・ハバシュ・アミードという富裕な商人が宮廷財政を司り、またチャガタイの庶子の教育の任に当たった。チャガタイはチンギスよりジャサ(法令)の監視者としての職を与えられ、初期モンゴル帝国の最高司法官としての権限をもち、羊を殺すことや沐浴などを禁止したジャサの規定を犯しやすい中央アジアのイスラム教徒に恐れられ、イスラムの史家より暴君と批評されているが、むしろ厳格で素朴な遊牧貴族で、チンギス・ハーン没後のモンゴル帝国の長老として尊敬された。そのため、かれは「ハン」の称号とともに「アハakha(皇兄)」の敬称を持っていた。

37 前掲書『中央ユーラシア史』176~177頁。

38 華北・トルキスタン・イランはハーンの三大属領とされ、そこには総督府が置かれて徴税業務がおこなわれた。

39 宮脇淳子著『モンゴルの歴史：遊牧民の誕生からモンゴル国まで』刀水書房、2002年、119頁。

(2) モンゴル帝国とムスリム

モンゴル帝国ではムスリムたちも活躍の場が与えられた。トルキスタンの徴税業務を任されたマフムード・ヤラワチは初期のそうした代表的人物の一人である。モンゴルとムスリム商人の協力関係は、文献で確認できるかぎりでもチンギス・ハーンの時代にまでさかのぼる⁴⁰。チンギスの中央アジア遠征はムスリム商人の積極的な参加をえて、見事なシナリオに沿って整然と遂行された。チンギスの遠征に限らず、イスラム世界でのモンゴルの軍事活動には、その方面に通じたムスリム商人が自分たちの能力と組織をあげて協力している。作戦計画の立案、敵情調査、降伏勧告、外交交渉、軍事物資の調達・輸送など、彼らの担当は多岐にわたった。駐留軍と協力して、征服地の行政・財務を担ったのも彼らであった。

しかし、キリスト教に好意を寄せていたグユクが第3代皇帝〔ハーン〕(在位1246~48年)に即位すると、ただちにイスラム教徒の勢力を排除し始め、母のトゥラキナ Turakina (トレゲネ「脱列哥那」)の摂政在位中に勢力を伸ばした財政顧問のアブドゥル・ラフマーンや、彼女の親しい友人であったファティマというペルシア女性を含む何人もイスラム教徒を退けた。それに代わって、オゴタイの元首席秘書であり、トゥラキナによって退けられていたネストリウス派教徒のチンハイをその地位に据えた。後には、首席秘書官として同じネストリウス派の主教ブルガイを登用した。が、彼が就任してすぐ、前任者のチンハイが陰謀を企てた罪で告発され、ムスリムの廷臣ダーニシュマンド・ハージブの手によって処刑された。こうした宮廷内の争いには各宗教間の党派的な策謀が背景にあったという内情については、たまたまグユク・ハーンの即位式に出席するという榮譽を受けたブラノ・カルピニが証言している。

チャガタイのあとを継いだのは、パーミヤーンの戦いで戦死した長子ムアトゥカンの子ハラ・フラグ (Khara Hulagu「哈刺旭烈」、在位1242~46年)であったが、モンゴル帝国第3代皇帝グユク・ハーン(定宗)の命令でハラ・フラグはしりぞけられ、イエス・モンケ (Yesu Mongke「也速蒙哥」、在位1246~52年)がチャガタイ・ウルスのハンとなった。彼の宮廷財政を司ったのはバハー・ウッディーン・マルギーナーニーという人物で、彼は大いにイスラム教徒を保護し、彼の家は文人の集合所となった。

1248年のグユク・ハーン(オゴタイ家出身)の死後、オゴタイ家はトゥルイ家と第4代のハーン位継承を争ったが敗れ、1251年7月、帝国の長老で随一の実力者であったバトゥの支持を得て、トルイの長男モンケが帝位(憲宗、在位1251~59年)につくと、オゴタイ=ハン(太宗)の孫でオゴタイ家の当主であったハイドゥ (Khaidu「海都」、?~1301年)は封地削減の処置を受け、イリ川流域のハヤリク(カヤリグ)の地が指定され、そこに流された。

また、この第4代皇帝モンケの即位に伴う政変で、オゴタイ家とともにチャガタイ一門も多くのものが処断され、イエス・モンケに代わって自派のハラ・フラグ(カラ・フレグ)の復位が認められたが、まもなく彼は没し、その妃オルガナ・ハトゥン (Orghana Khatun、在位1952~61年)が幼子ムバーラクシャーの摂政として統治した。宮廷ではイスラム教支持派のバハー・ウッディーンが処刑され、父チャガタイ時代のハバーシュ・アミードがふたたび勢力を回復した。

中国領域の統治を任せ元朝を創始したフビライは、より積極的にムスリム商人を国家経営に参画させた。フビライの財務長官として辣腕をふるったアフマド・ファンカーティ (Ahmad Fanakati「阿合馬」)は、シル川中流域の町バナーカト(現シャルヒーヤ)出身のムスリムであった。かれはフビラ

40 前掲書『中央ユーラシア史』194頁。

イの支配下で一族や一党のムスリム（その人脈は中央政府で133名、そのほか581名を数えたという）を配し、1262年から82年まで約20年にわたってムスリム・ネットワークを利用して国家の財政・経済部門を担当した。が、中国人や外国人からの強奪によって大いに恨みを買ったことで悪名高く、敵対者たちを追放したり処刑したりし、最後には中国人の將軍・王著によって暗殺された。死後、数々の不正が露見したとして奸臣に列せられ、一族一党の多くも失脚し処刑された⁴¹。

預言者ムハンマドにつながる家柄であるブハラ出身のサイイド・アジャッル・シャムス・ウッディーン・オマル（Sayyid Ajall、この名称自身が「最高の聖裔」という意味の尊称であった。「賽典赤瞻思丁烏馬児」）は陝西（咸陽王）や四川での財務行政で功績をあげた後、雲南行省平章政事（知事）をつとめ、雲南開発で名をはせた。彼は雲南開発のために中央アジアのムスリムやウイグル人を多数入植させ、水利開発による耕地拡大、農業新技術の普及による収量増大、税制改革、金山・鉞山の開発、ジャムチの開設などを実施した。彼の子孫は雲南を拠点に、泉州や福州での海外貿易や中央政界にも進出した⁴²。

ムスリムを中国地域での財政や徴税に活用したことは、中国人がペルシア人やアラブ人イスラム教徒に対して持つ「共謀し信頼できない商人」という紋切り型の思考を再び広めることになったが、明代の史書など漢文文献は、アジャッルが公正で才能のある官僚であると記すとともに、儒教の倫理の弁護者としても描いている⁴³。

おわりに

本稿をまとめて言えば、次のようなことが指摘できる。10世紀にカラハン朝によりイスラム教が東トルキスタン（新疆西部）に流入してから、1513年にハミから仏教勢力が駆逐されて東トルキスタンのイスラム化が完成するまでに、約500年の期間を要した。それは、12世紀初めにカラハン朝がカラキタイという非イスラム政権によって中央アジア東部から追い払われて以後、そして13世紀初めからは同じく非イスラム政権であるモンゴル帝国の支配下で、約200年間、イスラム教はシルクロード中央部におけるその卓越した地位を失い、仏教やネストリウス派キリスト教の隆盛により最大の困難に直面していたからである。カラキタイ及びモンゴル帝国が宗教寛容政策を実施したことにより、各宗教の自由な布教活動が容認されたため、それまでイスラム教と仏教の境界線が明確であった新疆の宗教分布状況は、イスラム教・仏教・キリスト教やシャマニズムなどの多宗教の同時混在状況へと変わった。

新疆東部のトルファン盆地では、天山ウイグル王国（「高昌回鶻王国」）のもと仏教が隆盛を極め、石窟寺院（千仏洞）の建立や仏典のウイグル語訳が大々的になされた。新疆南部・西部では、衰退現象が一部みられたが、イスラム教が引き続き主要な宗教であり続けた。新疆最東部のハミでは、マルコ・ポーロの記述によればイスラム教徒が仏教徒よりも多くなっていた。新疆北部では、ネストリウス派の流行が見られた。各宗教を平等に扱う政策を維持していたモンゴル帝国では、宗派に関係なく、高度な文化を発展させた仏教徒のウイグル人と、財政経済に能力を発揮していたイスラム教徒が高官に抜擢され、モンゴル帝国を支えた。

41 『中央アジアを知る事典』28頁。

42 『中央アジアを知る事典』211～212頁。

43 前掲書『シルクロードの宗教』166頁。